

# 鳥邊野めぐり

梅徑莊私記より

森 ほのほ

## よしの塚

鳥邊山はお俊傳兵衛の墓のある本壽寺の東、妙見宮の境内に「よしの塚」がある。今は朽ち果てた古木の櫻（吉野櫻）の傍に青い自然石の碑があつて表に「嘸さくらわれは廓の菜たねさへ」の吉野太夫句を散らし書きにし、裏には左の縁起を誌してある——。

明治三十八年十二月、四條南座に於て始めて吾がさくら時雨を演じたるに、中村芝雀よしのを勤めて雅客にめでられしを喜び、其一句を彫りて茲に一碑を建つ、此に依りて彼を思ふ一端ともならば、花もまた情の露に笑むなるべし。

月郊散人

堂本寒星氏の『南座』に據ると、この時は前狂言が「桐一葉」で「さくら時雨」（二幕）は切狂言として上演され、我當（先代口左衛門）の紹由、三郎兵衛に芝雀（三世雀右衛門）が吉野太夫を勤めたので、その記念として芝雀が發起となり、翌三十九年二月、件の碑が有志に依つて建てられ、「さくら時雨」の作者高安月郊氏（同人高安吸江氏の令兄）を始め在京の文士雅人相集つて供養會を擧げたのであつた。

因に當時南座はまだ松竹の手に入らず、安田彦三郎の座であつたのを浪花や角の秋山儀助が借り受けての顔見世だつたのださうである。

## 藝界展望

- ▽文樂の三月 菅原の道行、先代御殿、吉田屋、合邦、新作忠靈、太十。古観は合邦の切、文五郎の玉手、榮三の合邦、政龜の女房等。忠靈は西亭の脚色作曲。前シテ後シテ共に榮三。大夫は相生、織大夫等。
- ▽文樂の四月 連獅子、新口村、三莊大夫の山、千本櫻（椎の木から鮎屋）、新曲水づく屍（西亭作詞作曲）、野崎村。古観は鮎屋。榮三の權太、文五郎のお里、光之助の彌助等。新曲は織大夫。
- ▽京阪劇壇（四月） 歌舞伎（五郎）中延若、梅玉）角（厚生劇）南（家庭劇）。
- ▽東都の丸本物 三月の歌舞伎座に珍らしく「双蝶々」、羽左の放駒と與五郎、菊の濡髪、共に評判よし。なほ羽左の十八番盛綱陣屋あり。
- ▽四月の園菊祭 相かはらずの鮎屋、河内山等々……。
- ▽綾之助追悼 初代綾之助追悼の義大夫會、三月五日藥師宮松に催さる。
- ▽本流新派解散 三月の東劇を最後に解

## おしゆん傳兵衛

お俊傳兵衛の比翼塚といふことに今ではなつてしまつたが、實はお染半九郎（宗秋信士妙秋信女）——蘭八では浮橋縫の助——の墓といふのが本當ださうである。寺の建札には元文年間の建立とあるが、お染半九郎の心中は百年ほど前の寛永三年九月、おしゆん傳兵衛の心中は元文三年十一月十六日の朝と傳へられてゐる。尤もこれは所謂巷説であつて、淨瑠璃名作集（江戸文藝叢書第七卷）の黒木勘藏先生の解説に據ると、元文三年よりも二十年前の享保三年に京都夷屋座で上演した「おしゆん傳兵衛十七年忌」から逆算してみるとこの心中は元禄十五年の事となる。多分はその頃であつたらしく、それから二年後の寶永元年出版の『心中大鑑』の中の「東河原は夜明けの紅」は八百屋おしゆんと米屋庄兵衛の心中話で、これだと母親が敵役で、おしゆんを身賣させて金にしようとする、庄兵衛は

それを救ふだけの金も無く、遂に二人は四月五日二條河原で心中してしまふので、これが歌祭文では傳兵衛となつてゐる。

近松門左衛門の作詞と傳へる上方唄の「鳥邊山」——義大夫の「堀川」でおつるが稽古してゐる——それにはお染の名は見えてゐるが、半九郎の名は無い。尤もこれには原作があつて、それは前の『心中大鑑』より二年後の寶永三年正月、京都の都萬大夫座で上演した「鳥邊山心中」の道行がそれで、前に述べた蘭八の「鳥邊山」は即ち件の上方唄を改作したのである。

## 藝能者墓群

お俊傳兵衛の寺で名の通つてゐる本壽寺（日蓮宗）の墓地には俳優、大夫、三味線など、藝人の墓がかなり澤山ある。先づ梅玉歌右衛門のから書きつけてみることにする。

歌唄院宗讚日德信士

天保九年  
七月二十五日

雨足院善苗日豊信女

天保六年  
四月十八日

散、いづれ再舉更生とか。

▽文化座創立 井上演劇道場の山村聰、

荒木玉枝等十一名退座、四月半、梅本重信作「武藏野」で旗挙げ。

▽瑞穂劇團設立 農山漁村文化協會に依つて國民演劇として誕生。

▽大日本舞踊聯盟の動搖 副部長勘十郎

の脱退に次ぎ會長勘齋、部長壽輔も辭意を洩らし、前途不安。

▽梅若の劇場進出 情報局移轉で帝劇は

再び東寶系として三月二十三日開場。梅若六郎一門記念招待能に翁を、廿六、七の二日演能公開。

▽新生新派渡瀨 滿洲國建國十周年に際し滿洲演藝協會の肝入りで日本藝能部隊として出張、なほ滿鮮各地巡演。

▽河合武雄丈近く 一昨年來療養中の處

三月二十一日逝去。享年六十六。四月登場の噂ありしに遺憾の極みなり。

▽野澤吉兵衛逝く 昭和十二年故竹本士

佐大夫と共に文樂座を引退した七世野澤吉兵衛は門人稽古の爲上京中四月廿三日夜急逝した。

▽文樂淨瑠璃の夕 四月廿七日、京都朝

日會館に於て開催、「阿波十」源大夫、八造

「壽し屋」呂大夫、仙糸其他、主催國粹古典

藝術鑑賞會。

三代目歌右衛門の墓は高津の正法寺に在るが、これは墓石にも彫つてある通り二代目富十郎の建立したもので、水鉢にも二代目中村慶子とある。香爐は二世中村梅玉即ち梅玉、大正五年六月建立と誌されてある。

○ 四代目實川延三郎碑  
明治三十九年  
實相院玉芳日正清信士  
一月三十日  
(男實川伊一建)

○ 五代目實川延三郎  
延實院正若日和清信士

俗名 土村國造  
明治四十四年八月十四日建之

○ 六代目實川延三郎  
昭和十七年  
延實院秀若實雄清信士  
一月二十四日

右の四代目は鴈治郎、右團次(齋入)、福助(梅玉)、巖笑、瑠狂等と腕を競つた人、五代目は鴈治郎一座にもあり、川上革新劇第一團にもあつて、左團次等と新演劇に歩みを共にした新人、六代目は若手一座の立女形として前途を囑望されてゐたあの井筒屋で、碑とは別な四代目の墓へ合葬されてゐるらしく卒都婆のまだ新しいのも哀である。

○ 五代目團三郎  
四代目市川團三郎(河村家)  
三代目喜代三良

臺石に中村福助、中村政次郎、市川荒太郎、荒五郎の名が刻まれてある。

○ 正善院萬法日義信士  
明治十九年  
十一月十八日  
聲義院家若日定信士  
明治十一年  
七月二十八日

○ 二代目秋峰院宗輝信士  
大正六年  
十月七日  
花立に家若高嶋屋とある。

○ 三代目 湖出市十郎 信解了達信士  
杵屋 左多 深達妙音信士

安政六年四月、門人中で建立したものの、初代は江戸の人で、地唄の黒髪、髪すき等の芝居唄を節附した名人。

○ 六代目 鶴澤傳吉 慈光院智正信士  
明治三十六年四月建之  
芝村内

○ 九代目 鶴澤傳吉 大譽傳光祥安禪定門  
明治十年八月建之  
先斗町千鳥連

○ 鶴澤紫騰 仁譽義山勝翁居士  
明治三十五年二月 發起清水福之助

○ 七代目 鶴澤三二 觀誓玄月法友禪定門  
明治三十年九月 清水福之助建之  
五代目 鶴澤友次郎 觀誓紫神壽翁禪定門  
明治二十九年六月

○ 豐澤廣左衛門 豐譽無涯深廣居士  
明治三十五年十一月建之  
河原町

○ 竹本蟠龍軒 (抱キ柏紋)  
明治十九年十月 吉田龜助建之

○ 八代目 竹本錦大夫 淨音院眞覺觀融居士  
昭和十六年十月建之  
豐澤初團の花立あり  
尚、清水寺へ通じる沿道に在る左の墓碑が目にとまつた。

○ 竹本是大夫 享和二年十一月建  
三代目宮古路一仲  
文化三年八月四日 行年六十四歳  
野澤喜八郎 文化十三年仲冬建之

○ 妙勝 三代目綾小路 野澤喜八郎  
釋 喜常 四代目橋下 野澤喜八郎  
妙喜 安政三年辰春再建

○ 二代目 野澤喜風  
間之町 野澤喜八郎 正岸受法信士  
以上二つの墓は日本因會に依つて昭和十二年補修されてある。